

東北雑草研究会 99 (第1回東北雑草研究会) のころ

吉岡 俊人*

The time of the inauguration of the Weed Science Society of Tohoku

Toshihito Yoshioka*

昨年(2008年)8月、第10回東北雑草研究会が福島市において開催された。ノビエ小穂を絵柄にした研究会設立10周年記念の手ぬぐいもいただき、雑草研究に関する東北地域の先進と熱意をあらためて実感した次第である。東北の雑草第1号に掲載されている東北雑草研究会設立の経緯には、本研究会が1999年に東北雑草研究会99としてスタートし、2001年に日本雑草学会東北支部会に位置づけられるに至った経緯がまとめられている(東北雑草研究会, 2001)。手元にある資料や写真を眺めながらその文章を読むと、研究会立ち上がりのころのさまざまな場面が思い出される。ここでは、そのような時期の状況や臨場感を少し詳しく伝えたいと思う。

1. 東北地域雑草制御研究会

1995年、東北において雑草に関する2つの会議が開催された。日本雑草学会第34回大会と第1回東北地域雑草制御研究会である。宮城県仙台市の東北大学農学部が会場となった日本雑草学会第34回大会では、東北大学から星川清親氏、菅洋氏、三枝正彦氏、後藤雄佐氏、渡邊肇氏、筆者が運営委員となった。運営委員長であった星川氏が大会直前に他界されたのは痛恨事であったが、この時の運営委員会メンバーが東北雑草研究会発足に大学側から関わることになる。

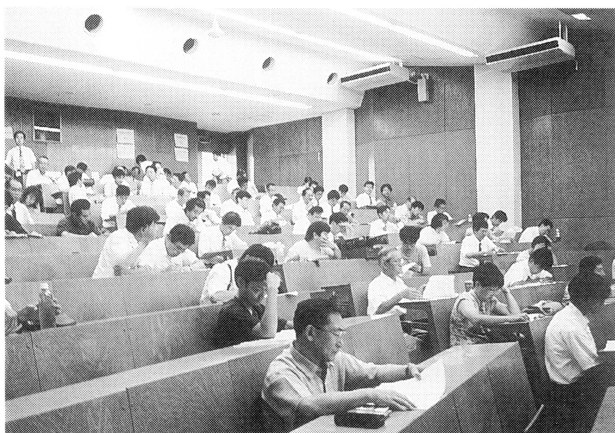
東北地域雑草制御研究会は、のちに東北雑草研究会へと発展する母体と位置づけられる。この会は、東北農業試験場雑草制御研究室長であった伊藤一幸氏が中心となって運営され、1995年に第1回目研究会が第15回アジア太平洋雑草科学会議のサテライトシンポジウム(テーマ; 水稲直播栽培における雑草防除)として秋田県大曲市で開催された。翌1996年には、第2回目の東北地域雑草制御研究会が「SU抵抗性雑草」をテーマに行われ、

国県の農業試験場等の水稲作関係者を中心に35名が参集した。ここで、東北地域の国と県の担当者が雑草防除に関する諸問題を直接話し合う場ができたことになる。しかし、東北地域雑草制御研究会は、東北の水稲作における国と県の雑草研究の進展をはかるために東北農業試験研究推進会議が主催する枠組みで行われたために、参集範囲や取り上げる課題が限定されるという側面があった。

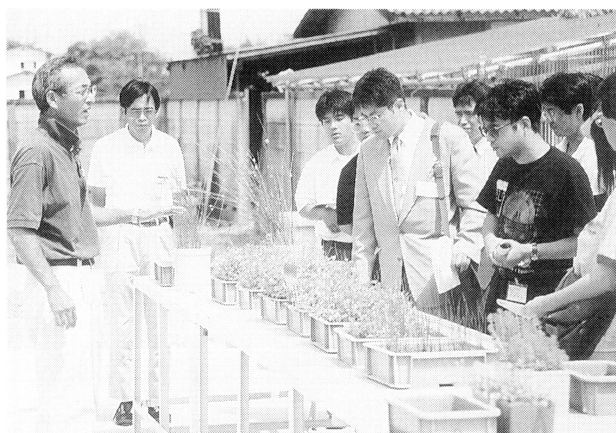
それまで東北では、県の雑草防除関連部署、日本植物調節剤研究協会(以後、日植調)、農薬会社が集まって水田除草剤に関する研究集会が毎年開催されており、1992年以降では「低コスト稲作と除草剤」、「水田用フロアブル除草剤」、「水田雑草発生状況と省力防除法」、「低コストジャンボ除草剤の開発」がテーマとして設定されて、農薬各社から毎回30~60名の参加者を得ていた。このように東北では、国、県、民間において雑草に関する研究集会開催のポテンシャルがあることから、1996年に東北農業試験場雑草制御研究室長に赴任した渡邊寛明氏は、大学が恒常的に参加することが期待されるのであれば、東北地域雑草制御研究会を参集範囲に制限のない独立した研究会へと発展させていくことが可能だと構想した。当時、全国大学農場共同研究「畑地及び樹園地における雑草の生態調査」に東北の各大学附属農場の先生方が加わっており、農学部以外にも雑草を植物材料としている研究者もいた。そこで、1997年8月に行われた第3回目の東北地域雑草制御研究会(テーマ; 主要水田雑草の分類およびスルホニルウレア剤抵抗性雑草の状況)においては、東北の各大学にも会議への参加が呼びかけられた。その結果、国県の農業試験場23名、日植調6名、一般1名の他に、弘前大学農学部、岩手大学農学部、東北大学農学部、東北大学理学部、宮城県農業短期大学から8名の合計38名がこの研究会に参加した。また、会議

* 福井県立大学生物資源学部 〒910-1195 福井県吉田郡永平寺町松岡兼定島4-1-1

Faculty of Biotechnology, Fukui Prefectural University, Eihei-ji, Fukui 910-1195, Japan



第1図 東北雑草研究会99（第1回東北雑草研究会）研究発表会



第2図 東北雑草研究会99（第1回東北雑草研究会）エクスカージョン

クミアイ化学工業東北研究センター・河野一彦氏による水田雑草展示の説明。

の中で、東北地域雑草制御研究会を勉強や研修のみならず積極的な研究発表や情報交換の場として発展させる可能性についても議論され、各県の考え方が把握された（本会議の詳細は、渡邊肇（1998）を参照）。1998年には、第4回目の東北地域雑草制御研究会（テーマ；最近開発が進んでいる拡散型除草剤の利用技術と実用上の問題点）が平成10年度東北地域水稲栽培夏期研究会として開催され、国県の農業試験場から29名、日植調から7名、そして大学から8名（岩手大学農学部、東北大学農学部、秋田県立農業短期大学、岩手県立農業大学校、山形県立農業大学校）、合計44名の参加があった。この1997年と1998年の東北地域雑草制御研究会の状況や農業工業会東北支部各社から協力を得られる見通し等を判断して、東北農業試験研究推進会議主催の枠を離れたオープンな研究集会の開催に踏み切ることになる。

2. 東北雑草研究会99（第1回東北雑草研究会）

1999年8月18、19日、宮城県仙台・大崎地区で東北雑草研究会99（第1回東北雑草研究会）が行われた。これは、前述の経緯で開催されたオープンな研究集会で、現在の東北雑草研究会の第1回になる。運営委員会は、運営委員長の三枝正彦氏、雑草学会東北ブロックの評議員、農業工業会東北支部会幹事、東北地域内の大学、農試・農政部局、日植調、メーカー研究所の雑草関係者で構成され、各々が関わる広い範囲に案内が送付された。

研究会第1日目には、民間会社から47名、大学から28名、国県の農業試験場等から22名、日植調から6名、一般から3名など計116名の参加があり、東北大学農学部を会場にして研究発表会、講演会、懇親会が行われた。まず、開会の挨拶として三枝氏から雑草研究の重要性および研究会開催の意義が述べられた後、研究発表会では、記念すべき最初の演題が帰化種ミチタネツケバナの生活

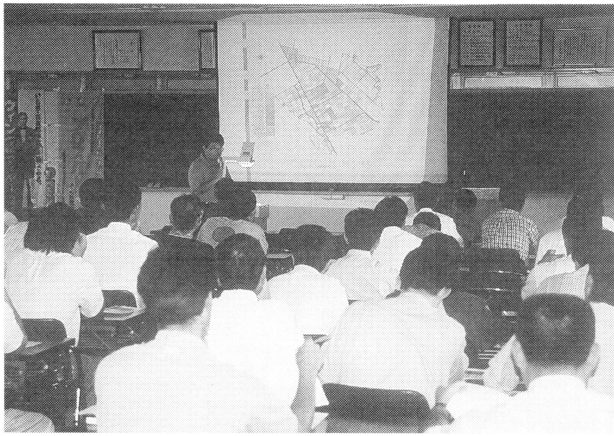
史特性で、続いてヒメムカシヨモギとウリカワの生物学、水田、畑、果樹園の有機栽培における雑草防除、スルホニルウレア抵抗性雑草などの報告があった（第1図）。次に、講演会では「最近、東北地域で問題になっている外来雑草」をテーマにして草地、飼料畑、水田、非農耕地を対象に講演されたので、様々な所属の参加者が広い範囲のテーマについて発表と情報交換をするというこの研究集会開催の目的をかなえる内容となった。

またこの日には、今後の研究会の持ち方についてアンケートが行われ、48名から回答が寄せられた。このうち、東北地域で雑草研究に関する集会を定期的に開催する必要があるかとの問いに対して45名が必要だとし、次回も参加する意思があるかについても46名があるとの結果であり、東北雑草研究会の継続に大きな後押しとなった。

第2日目は80名が参加してのエクスカージョンであった。朝、バスで東北大学を出発し、小牛田のクミアイ化学工業東北研究センターで水田雑草の展示を見学（第2図）、その後、スルホニルウレア剤抵抗性イヌホタルイが発生している現地圃場での除草剤試験を視察した（第3図）。真夏の空の下、参加者の皆さんが類似雑草の見分け方や除草剤抵抗性雑草に対する防除法などの説明に汗びっしょりになりながら熱心に耳を傾けていたことが今も印象に残っている。

3. 東北雑草研究会2000（第2回東北雑草研究会）、第3回東北雑草研究会（日本雑草学会東北支部会）

2000年8月18、19日には、東北農業試験場が運営事務局になり、東北雑草研究会2000（第2回東北雑草研究会）が岩手県盛岡・葛巻地区で開催され、97名の参加があった。第1日目は、水稲除草剤情報交換会、研究発



第3図 東北雑草研究会 99 (第1回東北雑草研究会) エクスカーション

吉田修一氏によるウルホニルウレア抵抗性イヌホタルイ対策の除草剤展示図の説明。

表会、講演会(テーマ;無農薬・減農薬作物栽培における除草技術)、懇親会がプログラムされ、第2日目のエクスカーションでは、東北農業試験場内の研究施設を見学した後、バスに乗り込んで葛巻町に向かい、デントコーンや雑穀の無農薬での栽培状況を視察した。

東北雑草研究会 99 と東北雑草研究会 2000 を通じて 100 名前後の参加が得られ、和気あいあいながらも活発な議論がなされたことから、東北地域での雑草に関する情報交換と雑草に関わる者の懇親を図るための恒常的な研究会を設立するニーズが大きいことが実績として確かめられた。当時、日本雑草学会では、九州雑草防除研究会が 1971 年に、日本雑草学会中国・四国研究会が 1987 年に、関東雑草研究会が 1989 年に、近畿雑草研究会が 1998 年にそれぞれ設立されて例会の開催および機関誌の発行が行われており、東北・北陸ブロックでの支部会の発足が要望されていた。これらの背景にたって、今回の東北雑草研究会においてこれを日本雑草学会東北支部会に組織するための準備が進められた。まず、会の名称には引き続いて東北雑草研究会を用い、かっこ付けで日本雑草学会東北支部会を併記することとし、会の目的を会員相互の親和、協力を深め、東北地域における雑草及び雑草の制御や利用並びにそれらと環境との関わりに関する学術の発展及び技術の普及を計ることに定めた。学会本会では議論を尽くせない雑草の地域的課題を取り上げて、忌憚なく会員間で意見交換することを意図したものである。事務局を東北農業研究センター水田利用部内に置き、年 1 回の例会開催と会報の発行を事業とした。これらは規約案にまとめられ、次回東北雑草研究会にて諮られることになった。会報については、発行に必要な原稿数が集まるかの心配もあったが、査読制にして原著論文と総説、研究・技術情報を掲載し、会の顔に育てていこうという思いで意見が一致した。そして、2001 年 2 月の日本雑草

学会幹事会にて以上の経緯説明および東北雑草研究会(日本雑草学会東北支部会)設立の提案が渡邊氏からなされ、2001 年 4 月の日本雑草学会評議員会および総会にて承認されるにいった。

2001 年 7 月 25, 26 日、第 3 回目の東北雑草研究会が宮城県古川農業試験場にて開催された。プログラムは、第 1 日目が雑草防除技術情報交換会、東北雑草研究会(日本雑草学会東北支部会)設立総会、記念講演会「東北の雑草研究、今後への期待」、研究発表会、懇親会、第 2 日目が古川農業試験場内の試験圃場見学であった。第 1 日目の設立総会において規約案が可決されて東北雑草研究会(日本雑草学会東北支部会)が正式に発足した。東北雑草研究会 99 を第 1 回東北雑草研究会に、東北雑草研究会 2000 を第 2 回東北雑草研究会に位置づけることも認められ、したがってこの時が第 3 回東北雑草研究会ということになる。また、参加者の会員登録手続きが行われ、原著の報文 4 報および研究・技術情報 4 報を掲載した会報「東北の雑草」第 1 号が手渡された。東北の雑草は、ISSN(国際標準逐次刊行物番号)が取得されて、オリジナルな情報を掲載し続けている。毎号を手取るたびに、地域研究会の会報として高い質が保たれていることに感心している。

東北の雑草第 1 号に日本雑草学会会長であった原田二郎氏は次の文を寄せている。「東北地域は、これまでもそうであったようにこれからもわが国の最も重要な食料の供給基地であり続けるでしょう。また、雑草防除の面では、春季低温のために雑草の発生がばらつき、除草剤による防除は一層困難な地域でもあります。したがって、東北の農家の雑草防除にかかる意気込みが格別なものであるのは容易に理解できるのです。」筆者は現在、福井県立大学に所属しているが、北陸から東北雑草研究会に注目すると、東北での雑草防除の重要性を背景にして会員の層が厚いのは尤もだと思し、同時に、例えばこの地域で除草剤抵抗性雑草の研究や発表が継続されてその防除対策が進展したように、地域から発信して学会全体をリードする特色を東北雑草研究会が備えたことは何より素晴らしいと感じる。創立から 10 年間東北雑草研究会を運営されてきた役員各位に敬意を表するとともに、次の 10 年さらにその後も、本会が地域における雑草研究の先導的役割を担っていただきたいと思う次第である。

引用文献

- 東北雑草研究会 2001. 東北雑草研究会設立の経緯. 東北の雑草 1: 36-42.
渡邊 肇 1998. 東北地域雑草制御研究会に参加して. 日作紀 67: 241.